幼児の言語活動を促すもの（その１）
―散歩における３歳M児との会話の実態から―

桒 原 昭 徳

On Promoting Speeking Activity of Young Child
—— A Study of Conversation with 3-Year-Old Child (M) in Walking

Akinori KUWAHARA

(Received September 27, 2000)

１．はじめに

1989年３月に改訂された幼稚園教育要領において、幼稚園教育の基本は「環境を通して行うものであること」と表現されはじめた。およそ10年後の1998年12月にも同要領に改訂が加えられたが、幼稚園教育が「環境を通して行うものであること」という基本的な考え方に変化はなかった。20世紀最後の10年間の経験をへたあと、目前の21世紀の幼児教育のキーワードが「環境を通して」であることに変わりはないようだ。これは同時に、21世紀の幼児教育方法のキーワードが「環境を通して」であることを示している。

領域「言葉」については、「内容の取扱い」の項に、次のような幼児の言葉の習得についての基本的な考え方が記されている。

「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意思などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものである（以下略、下線筆者）」

（注１）

幼児の言葉は、大人や教師の直接的な教え込みや注入によって習得されるのではない。そうではなくて、周囲の身近な人と親しみをもって接することにより、幼児自身が周囲の人たちに自分の感情や意思などを伝えたり、幼児の言葉に相手が応答したり、周囲の人の言葉を聞くことを通して徐々に習得されていく、というのである。

ここで、とりわけ留意しなくてはならないのは、上記２箇所で下線を付けている「言葉を聞くことを通して」という記述である。ここでの「通して」とは、直接的な教え込みや注入という教育方法ではなくて、幼児が自分の力で言葉を聞くという「自主的活動を通して」、いわば間接的に習得することなのである。（注２）

それでは、現実の「環境を通して行われる言葉の習得」は、どのような過程を経て行なわれるのか。その実態を調査するために、一人の幼児（３歳児）に、まったく新しい環境の中に入ってもらって、どのような言語活動が生まれるものかを観察することにした。

ここに登場するM児は1996年12月27日生まれの男児である。両親は山口県O市に在住し、ともに小学校教師である。母方の祖父母と同居する三世代の５人家族であり、M児は両親が結婚

して12年後に生まれた長男ということもあって、家族の中心にいる。日ごろM児は、家族から「マックン」と呼ばれているし、私もそう呼ぶのだが、以下の本論中ではMとする。また、筆者（桒原）はK、父親は父、桒原の妻はSとした。

筆者が初めてMと出合うことができたのは、Mが誕生して1年3か月後の1998年3月29日であった。Mと筆者の2度目の出合いは、その2週間後に、Mの写真撮影のために出かけたときのことである。また、Mが2歳11か月になった1998年12月6日夜には、電話を通じてMと話す機会があった。以上のいずれについても、すでに拙著『幼児との接し方』の中に取り上げ、幼児の活動の視点からの分析を試みている。（注3）

3度目にMと顔を合わせることができたのは、最初の出合いから1年後の1999年3月27日のことで、Mがちょうど2歳3か月になった日のことであった。そのときの会話の記録も同書に収録してある。（注4）

このたび本論でとりあげることになったMとの「初めての散歩」は、2000年8月2日の11時から約1時間にわたって行うことになった。この日、Mは3歳7か月になったばかりであった。散歩を試みた場所は拙宅に近くにある田んぼのあぜ道である。この散歩道は、すでに1991年5月下旬より「マー君」という幼児との散歩を実施してきたと場所で、当時マー君は3歳8か月児であった。（注5）

今回の散歩コースにおけるMの初めての散歩は、偶然にもマー君が散歩を開始した年齢とほぼ同じで、3歳7か月である。（2000年3月下旬にMと出合うことを計画したが、釜山大学校付設保育園への視察との日程が重なることになり、実現できなかった。）

この日、M、Mの父、Kとの3人は11時から散歩をして、そのあと12時03分まで拙宅の居間でMといっしょに過ごすことになった。3人の散歩には、もう一人、すでにMと面識のあるSがビデオの撮影者として同行することになった。

2．散歩の中のMの言葉と類型化の試み

Mとの散歩をした8月2日当日の午前5時40分の気温は22℃で、台風の余波でかなり強い風が吹いていた。この直後に雨が降りはじめたのだが、6時05分から20分まで、K一人だけで下調べのための散歩を試みた。風と雨のために、わずかに、池から聞こえてくるゴーンゴーンというウシガエルの鳴き声、土手の草むらにジャノメチョウ（中型1匹）とカワラナデシコ、ジョロウグモ（13匹、今年特に多い）、フナ（小1匹、池樋門下）、ウスバキトンボ（6匹）を見ることができただけである。

10時を過ぎても、風がやまない。Mとの散歩の直前にも散歩コースを歩いてみたが、いつもの昆虫類を見ることができなかった。

11時前、父の運転するワンボックスカーが到着して、運転席の後ろにMの顔が見える。

以下、散歩とその直後の居間におけるMの言葉をビデオより文字化し、Mの言葉を促した要因についての分析を試みる。初めての環境に置かれた約1時間にわたるMの言葉は、その量においても質においても、はるかに私の予想を越えた。私の幼児教育方法研究にとって貴重な資料となるために、可能な限り網羅して記録化することに努め、発語の順序はそのままにした。

また、Mの言葉のまとまりごとに、「01●」のように番号を付してMの言葉を挙げ、そのあとに「言葉を促すもの」の類型化をした。

類型化に関しては、Mの視点から見たときに直接的に発語を促進したと考えられる事物の観点から区分を試みた。たとえば、「事前に教えてもらって」、「実物を見て」、「過去の経験をもとにして」などのように、大まかな「見出し」を付けることにした。

Mの言葉の類型化をする際に、たとえば「02●M「これ、見て！　ユンボ」――持参した実物を持って」の場合にも、発語を促すものとしては、「持参した事物」とも言えるが、ユンボを見る側のKという人間が居たからということもできる。物（ユンボ）と人（K）の両者の存在が無いことには発語は促されない。しかしながら、ここでは、Mの視点から見て、身近で直接的な要因であるユンボの方を取ることにした。

01●M「くわはらせんせい」――事前に教えてもらって

車の窓も開いていて、Mがこちらを向いていたので、私はMにたずねてみた。

K「だれかなあ、これ」と、私の顔を指さしながら言ってみた。Mの口から「くわはらせんせい」という、予想もしない言葉が返ってきた。

K「くわはら先生。へええ、覚えとってくれたん。ありがとうね。さあ、降りて」

Mは父親にチャイルドシートのベルトをはずしてもらい、抱きかかえられて車から降りてきた。

Mは短い半ズボンにチェック模様の半袖シャツを着ている。軽装である。

02●M「これ、見て！　ユンボ」――持参した実物を持って

K、Mに向かって「やあ、こんにちは」と呼びかけた。すると、Mは「これ、見て！」と、両手で持っていた物を見せてくれた。水色の車体に白い色のショベルのついているミニカーであった。K「これ、なに？」とたずねた。

M、即座に「ユンボ」と教えてくれた。K「ユンボ？」。M「うん」。

Mの手には、おもちゃのユンボが握られている。どうやら、拙宅に来るときの車中でも、このユンボで遊んできたらしい。

そう言えば、Mと最初に出合うことになった1歳3か月のとき、絵本の中のユンボを指さして、それが「ユンボ」であることを私に教えてくれたことがあった。（注6）

そのことを思いだして、K、「Mはユンボが好きなんじゃね」、つづけて「ちょっと、おじちゃんに見せて」と頼んでみた。Mは、大事なユンボを貸してくれた。子どもの手にもなじみやすい大きさである。パワーショベルも、きちんとついている。

K「へええ、ユンボと遊びながら、来たん？」と、たずねた。すると、Mはユンボを見せながら「これ、まわるんよ」と教えてくれた。

K「ええ？　ほんとに、くるくるまわるん？」と驚きの声でたずねた。M「うん」。

どうやらこの模型のユンボは精巧にできているらしく、パワーショベルの部分が回転したり、折れ曲がったりする。M、動かして見せてくれる。

03●M「これ、ビール、冷やして飲んでください」――事前に教えてもらって

Mと私がユンボで遊んでいるうちに、父が後ろのドアを開けて、たくさんのビールの入っている黄色いケースをアスファルト道路の上に置いた。これを見たMは「これ、ビール」と教えてくれた。そのあと「冷やして飲んでください」と言った。

K「冷やして飲むの」。M「うん」。K「ありがとう」。

飲み方まで教えてくれたMに感心した。きっと、K宅に向かうときの父との会話の結果であろう。それにしても、タイミングのよい時に言葉が出てくる。

04●M「あれっ。赤いやつ、赤いやつのバッグ」――自分の持ち物を想起して

車に近づいてMが「あれっ。赤いやつ、赤いやつのバッグ」と父に言う。

K「赤いの、バッグ？　なにが、入っとるん？」とたずねた。しかし、Kは、ビールケースのそばにしゃがんで「これ、ビール」と教えてくれる。K「これ、ビール？」と応答する。

父が車の前席から小さな赤いバッグ（リュックサック）を取り出した。Mは、父にリュックサックを背負わせてもらう。

K「赤いバッグをして。ようし」、K、外へ行く準備はできたという感じで受けとる。

K「どうするかな。いまから上にあがるかな（家の中に入るかな）、それとも、取りにいくかな、チョウチョやトンボ」。M「トンボ？」。

K、玄関の壁に立てかけてあった虫とり網を持ちだして、K「これ、取りにいってみる？」。

05●M「きょうトンボ、おらんよ」――既知の知識を想起して

M「行かん（行かない）」。K「行かん？　ちょっと行ってみようや」。

M「きょう、トンボ、おらんよ」。どうやらトンボ取りに行かないための理由があるようだ。

M「トンボはね、雨が降る日に（いないよ）」とつづける。

この日は朝から台風の余波の風が吹いていて、Mの言うとおり、直前のチェックのときには、あまり見つけることはできなかった。しかし、池の西側には、土手が風よけとなって、トンボが群れをつくって飛び交うことがある。

K「ちょっと風が吹くけえ、（トンボやチョウが、おらんかもしれん。でも）お父さんと3人で行ってみようや」と誘う。

父「お父さんと散歩に行ってみようや」。父「ちょっと、帽子を」

K「きょうは、雲っとるから（帽子がなくても大丈夫よという気持ち）」

父、車から麦わら帽子を出して、Mの頭にかぶせる。

K「ユンボは、車の中に入れとって」。父、ユンボをポケットに入れて、持っていく。

06●M「カブトムシもおるよ。クワガタもおるよ」――既知の知識を想起して

K「さあ、行こう」。M「カブトムシもおるよ。クワガタもおるよ」と教えてくれる。

K「クワガタを見たことがある？」。M「うん」

07●M「（網を）グーッとやってえ」――過去の経験に照らし合わせて

散歩道の入口にある池の流れ込みを３人でのぞく。水面を数匹のアメンボが泳いでいる。

K「これ、なに？」、つづけて「これ、なに？」といって、Mの目を、水面を泳ぐアメンボへ向けようとする。あとで分かるのだが、Mにとっては初めてのアメンボらしく、３度目くらいで、やっとアメンボの姿に目を留めた。

M「メダカ」と応える。K、すぐに「メダカじゃなくて、アメンボ」と訂正しておく。つづけて、「言ってごらん」とうながす。Mは即座に「アメンボ」と正しく発音した。

K「ちょっと、取ってみようか」。M「うん」

K「ほんとは、これ用（水用）じゃあないんだけど、マックンのために取ってあげよう」

K、アメンボを網でとろうとして、すくいはじめる。じつは、Kが手に持っているのは「虫とり用の網」で、いったん水にぬらすと、あとでトンボやチョウチョをとるときに困ることになる。そこで、K、袋状の網の先端を竹の柄といっしょにもって、網の部分をあまり濡らさないようにして取ろうとしたのであった。数度、こころみるが、取れない。アメンボの動きは素早い。K、網の中をのぞいて「ああ、入っとらん」。M「おしい」と言ってくれる。

K、もう一度こころみる。取れない。これを見ていたM、網の柄を自分の手で持って「グーッとやってえ」と言う。「グーッと力を入れてやって」というのである。

その時、目の前をモンキチョウが横切っていく。K「あっ、黄色いチョウチョがおった」。見送ったあと、K「グーッとやろうか、やっぱり」という。

M「グーッと、やらんと、とれんよ」とも言う。

K、Mの言葉を受け入れて、こんどは思いきって、上から勢いよく網をアメンボの上にかぶせた。どうにか１匹ほど取ることができた。K、網の中のアメンボを取りだしてMの目の前に見せる。Mは、嫌がることもなく、ごく自然にアメンボをつまんだ。虫をつかむことへの抵抗はないようである。祖父母との自然に触れる体験が背後にある。

K「逃がしてやって。アメンボよ」と言うと、M、すぐに指先からアメンボを放して、流れの中にもどしてやった。

08●M「こんどは大きいのをとって」――実物（アメンボ）を見て

M「こんどは大きいのをとって」と、新しい事態の中で、新しい要望を出した。

K「大きいのを？　ようし」。M「Mね」と言ったところで、K「あっ、大きいのがおるじゃろ」。父「ああ、いた、いた」

K、網の中のアメンボを取りだして、Mの指先に持たせる。K「はい、アメンボ」

K「はじめて？」。M「はじめて」。

K「はい、逃がしてあげてね」

K、３匹目を、指先につまませる。K「はい、これも、アメンボさんよ」

09●M「チカッと、せんじゃあ」――実物に触れてみて

アメンボをつまんで、自分の片方の手に触れさせる。M「チカッと、せんじゃあ」と言う。

K「なに？」と問い返すと、ふたたびM「チカっと、せんじゃ」とくりかえす。

アメンボが自分の手を「チカッ」と、刺さないではないかというのである。

M「あれ（アメンボ）を取って、あれ」。K「あれを？　ようし」。K「おらん」
K「よそへ行こう」。M「よそ？」。
3人で散歩道を進みはじめる。草むらに10cmばかりのカナヘビが見える。
K「ここに、お父さんが嫌いかもしれないが、・・・。M、ほら、ヘビが」
M、草むらをのぞいてみる。

10●M「すぐ逃がしてあげんと、死ぬる」――既知の知識をもとにして
65mの散歩道の入口で、K、モンシロチョウをとる。K「取れた、取れた」。
M「ヘビ？」、カナヘビのいた直後なので、この言葉がでる。
K「ヘビじゃなくて、チョウチョ」
M、Kが網の中から取りだしたモンシロチョウの羽をつまんで、自分で持つ。
羽の先がちぎれて、手から放れる。
M「ええと、すぐ逃がしてあげんと、あのねえ、死ぬる」
K「すぐに逃がしてあげんと、死ぬるんよね」
（父とKとの会話。Mはこの4月から幼稚園に行っている。3年保育である。O市のT小学校の前にある幼稚園とのこと。）

11●M「（アマガエルを）さわったことある」――過去の経験を想起して
この季節、この散歩道を進むと、足もとでは小さなカエルたちが草むらの中を飛びはねている。今年生まれたばかりの小さく、やせたツチガエルとアマガエルである。K、足もとの草の葉にとまっていたアマガエルを網でとる。K、Mに「これ、なん？」とたずねてみた。
Mは「カマキリ」とこたえた。
Kが「カマキリじゃなく、・・・」と言いかけると、Mが「カエル」という。
K「アマガエル、おもしろいじゃろ、小さくて」
K「おじちゃんは、まだ、さわったことないんだけど、M、さわったこと、ある？」とたずねる。M「M、さわったことある」。
K「ほら、これ、かわいいね」、逃がすときK「バイバイ」という。
さらに草むらの中のアマガエルを見つけて、K「ほら、ここにおる。ちっちゃい。ほら、おもしろいね。ピョンと跳ぶ。かわいいね。はい、バイバイしてあげて」
Mが、アマガエルを持つ。K「バイバイしてあげてね」

12●M「こんど、ぼく、つかまえる」――実物（網）を使うのを見て
Kがアマガエルを網でとったことに興味をもったのか、M「こんど、ぼく、つかまえる」と言う。Kの手から網をわたしてもらって、自分で溝の中をすくいはじめる。
水が少なくて獲物はいそうにない。それでも、しきりに網を動かしている。
K「きょうは風が吹くからね」。父「マックン、何をつかまえるの？」
K「なにをつかまえるの？」とたずねる。M「カマキリ」とこたえる。
父「カマキリ？」

13●M「ぼく、行かれんから」――新しい事態を前にして

散歩をはじめるときに自転車であぜ道を通って行った婦人が、細いあぜ道を引き返してこられる。狭い道なので、Mは父に抱かれて自転車を交わすことになる。

自転車の婦人が「イネの匂いがして」といわれる。

M「ぼく、行かれんから」という。父「どうしたの？」。M父の手を引っぱって進む。

14●M「クモ」――実物を見て

M、あぜ道のそばの溝の上に巣を張っている、ジョロウクモに気づく。M「クモ」と言う。

この夏、とくに多いジョロウグモである。

K「クモがおったね。よう（よく）気がついたね。大きなクモがおるねえ」

15●M「ほら、ピョンと、とんだ」――実物を見て

池の土手の終点に着く。この散歩道では、過去9年あまりの間に、6～7度しか見かけたことのない真っ赤な色のショウジョウトンボがいる。今年は、つい先日来、つづけて3度ほど見ることになった、ここでは珍しい部類に入るトンボである。そのトンボが、嬉しいことにMとの初めての散歩でとれたのであった。ビデオの中ではK「取れた、珍しいのが」と抑えた声で言っている。

というのは、その前に、ショウリョウバッタが、足もとの草むらにいたからである。ショウリョウバッタは簡単にとれるうえに、子どもたちの指を噛むようなことはない。K、ショウリョウバッタの二本の足をそろえて、人間でいえば膝の下あたりを指でつまむ。すると、ショウリョウバッタは、あたかも体操をするように、小刻みに体を上下に動かすのである。

K「体操するんよ。足を持って」といって、Mに手わたす。M、笑顔になる。ビデオカメラに向かってショウリョウバッタを見せて、ニコニコと笑う。

K「バッタ、いうんよ」と、名前を教える。Mは、すぐに「バッタ」と、正しく発音した。

M「バッタって・・・」。M、つまでいたショウリョウバッタを地面ちかくで放した。

M「ほら、ピョンと、とんだ」。

直前に捕獲して網の中にそのままにしておいたショウジョウトンボを、Mに見せることになる。K「きょうは、めずらしいのがとれた」。

網から真っ赤な体のショウジョウトンボをとりだして、4枚の羽を一つにそろえて、Mに手わたす。Mは、恐れることも、いやがることもなく、上手につまんでいる。そのあと放す。

16●M「ミミズ、つかまえたことある」――実物（ミミズ）を見て

父「先生は、取るのが速いですねえ」と言われる。そのとき、マックンが「ミミズ、つかまえたこと、あるよ」と言いだした。父によれば、Mの目前にあった溝の水のたまるコンクリートのマスの中で泳いでいたミミズを見て想起した言葉である。

Mの「ミミズをつかまえた」というMの言葉に、驚いたのはKである。すぐに「えっ、ミミズ、つかまえたことある？」と、問いかえした。Mは「Mの畑で」と、自分が実際に取った経験のある場所を、教えてくれたのであった。K「Mの畑で？」。M「うん」

そんな話をしながら、さらに「65mの散歩コース」の先にある広場へと進む。

17●M「たたいたら、来る」――過去の経験をもとにして

田んぼの上を、大きなアゲハが飛んでいる。Kが追いかけると、さらに田んぼの中央の方へ飛んでいく。とれそうにない。しかし、よく見ていると、散歩道にかぶさるようにして立っている梅の木にとまった。K「大きなチョウチョが・・・。お父さんに捕まえてもらおうか」

背の高いMの父なら、とれるかもしれない。

父「取れるかねえ」、そう言って父が網をもって、アゲハをとりにいく。

このとき、M「たたいたら、来る」といって、両手を合わせてパチパチと手をたたいた。

どうやら、池の鯉などでの「手をたたくと来る」という体験が再現されたらしい。

18●M「マックンはね、いちばん上手」―会話の言葉に触発されて

K「お父さんは、上手なんよ」と言った。この言葉に対して、M「マックンはね、いちばん上手」。K「なにが上手？」

M「あのね、ええとね、ミミズをつかまえるのが上手」という。

19●M「ミミズ、パッとつかまえたことある」―会話の言葉に触発されて

一度は逃げられたものの、土手の草の向こうで声がして、アゲハを網の中に捕獲した父の姿が見えた。K「あっ、とれた」。父が、網をもって、こちらにやって来る。

K「お父さん、すごいねえ」。これに対してM「マックン、ミミズ、パッとつかまえたことある」。ここでは、目の前のお父のチョウの捕獲と、自分のミミズの捕獲が対比されている。

K「マックンはミミズを捕まえるのが上手なんだって」。

父「チョウチョ」。K「お父さん、上手だね」。父「きれいな色でしょう、見てごらん」

K「チョウチョ、アゲハチョウ。言ってごらん」。M「チョウチョ」。

K「逃がしてあげて」

20●M「こんどは、Mが捕まえたろう」―周囲の人のしている事に触発されて

アゲハを手から放したあと、M「こんどは、マックンが捕まえたろう」。

そう言ったとき、目の前の草の上に小さなヤマトシジミがじっと止まっているのが見えた。

Mがもった虫とり網の柄に、Kの手を添えるようにして、上から網をかぶせる。

すると、Mがヤマトシジミを捕獲することになった。父「あっ、つかまえた。」

K「Mがつかまえた」。K、網から出すのを手伝う。M、手に持つ。

M、すぐに父のところへ持っていって見せる。父「シジミチョウ」。K「シジミチョウ」

K「逃がしてあげてよ」。K「お父さんも上手だけど、Mも上手だね」

21●「網、あるよ」―周囲の人の会話を聞いて

M、網をもって歩きはじめる。M、さらに網を持って進む。

Mの網をもつ姿が決まっている様子なので、K、父に「家に、網、ある？　ない？」とたず

ねた。父からは「ありますよ」という返事がかえってきた。
それを聞いていたMが「マックン、網、あるよ」と教えてくれた。

22●M「M、はだしになる」――目前の物（水たまり）に触発されて
朝のうちに雨が降ったので、アスファルト道のそばには浅い水たまりができている。M、水たまりにサンダルのまま入る。虫とり網も水につける。
M「M、はだしになる」。K「はだしになる？」。M「うん」
裸足になって、水たまりの中に入る。
Mが水たまりで遊んでいる間に、K、ヒョウモンチョウを捕る。
K「とれた、とれた。M、とれた、大きなチョウチョだ」、K「羽をやさしくもってよ」
M、ヒョウモンチョウをつまむ。そのまま、水たまりの方へ行き、水を飲ませるような仕草をする。K「逃がしてあげて」と声をかける。

23●M「Mはね、お着替え、持ってきた」――持参物を想起しながら
Mの真っ赤なリュックサックの中には着替えが入っている。
M「Mはね、お着替え、持ってきた」。K「お着替え持ってきたの？」。M「うん」。
父「お着替え持ってきても、（水遊びは）だめよ」。
Mによれば、着替えを持ってきているので、水遊びをしてぬれても大丈夫といいたい様子である。M、水たまりの中に入って、ピチャピチャと音をさせながら遊んでいる。
K「Mは、水が好きなんじゃね」。M「うん」。
ひとしきり遊んだあと、K「じゃあ、帰ろう」。M「でも、帰られんよ」
父「おもしろかったね」（散歩の始まりから１５分経過）
散歩コースを引き返しながら、K「あれだけ捕れるとは思わんかったなあ」
M、うれしかったのか、数回ほど跳ねながら散歩道を進んでいく。

24●M「アゲハチョウだ」――直前に覚えた名前を想起して
水遊びのために裸足になったのだが、素足では、あぜ道のデコボコは痛いはずである。ゆっくりと用心深く歩いているMを見て、K「足、痛くない？」。
M「パパ、……」と助けをもとめる。父「だいじょうぶ、だいじょうぶ」。
K、モンシロチョウを捕る。K「捕れたよう、M、白いのが捕れたぞお」
M、さきほど父が網捕ったアゲハを覚えていたのであろう、M「アゲハチョウだ」という。
K「うん、これはねえ、モンシロチョウ」と訂正する。M、指につまんで、見ている。
K「顔があるじゃろう、逃がしてあげて。バイバイ、バイバイ」

25●M「ほら、こうしたら、飛べる」――実物（チョウ）を持ってみて
M「ほら、こうしたら、飛べる」と言って、チョウの胴の部分を持ち、羽から手を放す。
K「こうしたら飛べるね。はい、逃がしてあげて」
Mは足が痛いらしく、父に抱っこされる。

26●M「あっ、はたけ」――実物（池の様子）を見て

背の高い父に抱かれたとき、それまでのMの目の高さからは見えなかった池の水面が見えたらしい。池の長兄は70ｍもある大きな池である。夏の最盛期には、池の水面のほとんどは、ヒシの葉に覆われていて、水は見えない。

M「あっ、はたけ」と大きな声を出す。一面の緑は、畑に見えたらしい。

K「畑じゃなくて、池よ」と応えた。もう一度、M「あそこは？」。K「あそこは、池」

M、父に抱かれて散歩道を進む。

K、あぜ道の草むらの中に自生しているカワラナデシコの花を１本ほどとる。

27●M「バチャバチャ泳げばいいじゃあ」――過去の経験をもとにして

父に抱かれたまま、M「池、わたってみる」。K「池は、わたってはいけん」。

M「池、入ってみる」。K「池は、入っちゃあいけん。あぶない、あぶない」。

M「大人じゃないと？」。

K「うん、大人じゃないとだめなんよ。子どもはいけんと思うよ」。

M「子どもはねえ、浮環をもって泳げばいいじゃん」。K「浮環をもって？」。

M「うん」。K「子どもは浮環をもって泳げば、いいよね」。

M「それで、水着を着て」。K「水着を着て」。

M「バチャバチャ泳げばいいじゃあ」。K「もう、泳ぎにいったん？」。M「うん」。

28●M「これ、ババに、おみやげ、しよう」――実物（花）を見て

Kが持っていたカワラナデシコを見て、M「あのう、これ、ババに、おみやげ、しよう」。

散歩コースの出発点にある池からの流れ込みまで帰ってくると、ほんのわずかであるが、池の水面がが見える。

K「マックン、あれが池よ。広い池で、お魚がいるんよ。アメンボ」

K「これ、アメンボの子どもよ」

29●M「足、洗うて入る、ぼく」――生活習慣をもとにして

M、父の腕から降ろされる。

アスファルトの道路へとむかうとき、M「足、洗うて入る、ぼく」。

30●M「さっきのサイレンは、お昼ごはんの時間ですよと、言ったんよ」――音を聞いて

歩きながら、M「あのね、さっきのサイレンは、お昼ごはんの時間ですよと、言ったんよ」と教えてくれる。Kには、サイレンは聞こえなかったが、Mには何かの音がサイレンのように聞こえたのかもしれない。

K「サイレンが鳴った？」、M「うん。お昼ごはんの時間」

玄関横の水道で足を洗う。K「ちょっと、足を洗おう」。K、蛇口をひねる。K、Mの足を洗う。

K「これ、おばあちゃんのおみやげだけど、あと、たくさん取ってあげるからね」

足を洗ったMを抱いて、K、玄関に入る。
K、玄関の花びんにカワラナデシコを入れておく。
K「これ、おばあちゃんのおみやげだけど、あとで、たくさんとってくるからね」
玄関先で足を拭くとき、K「ああ、足が大きくなったね。はい、足。足の裏。」

31●M「ジュースが並んだら食べるん？」——会話の言葉に触発されて
居間に入る。M「あれ、ユンボがないよ」。
M、父に「ユンボ」という。ミニカーのユンボをもらう。
M「見て、ダンプカー」、M、椅子にすわっている。K「ダンプカー、好きなんよね」
M「ここで、何を食べるん？」。K「ちょっと待って、ジュースがねえ」
M「ジュースが並んだら食べるん？」。K「そう」

32●M「手も大きゅうなった」——会話の言葉に触発されて
K「マックン、大きくなったなあ」
M「手も大きゅうなった」。K「見せて、見せて。さっきね、足が大きゅうなったのは、わかったけどね、手まで大きゅうなったんだね」。
M「うん、背が高くなった」。K「背が高くなったんよね」。M、椅子から降りて、そばに立って「気をつけ」の姿勢をする。
M「見て、ほら」。K「ああ、ほんとうだ。大きゅうなっとる」。
K「ジュースを持ってきてえや、お母さん」

33●M「M、お当番、やれるもん」——会話と関連する事柄を想起して
M「M、お当番、やれるもん」。K「なんのお当番、するん？」
M「お給食のお当番」。K「お給食のお当番？」。M「うん」
M「M、給食当番できる」。K「じゃあ、ちょっと手伝ってくれる？」
M、扇風機のところへ行き、「どこ、押すん？」
K「じゃあ、扇風機当番、やってくれる？　給食当番もするんかね？」
M「うん」。K「へええ」と感心する。K「給食の当番は、なにをするのかね」
M「あのね、ええとね、これ（おもちゃの部品が）がとれた」
M「給食のお当番は、・・・のお当番」

34●M「Mは、ミッキーの大きいのがあるよ」——会話の言葉に触発されて
Mの前に、Sがジュースを置く。K「Mの（コップの絵）は、なんだ？　ミッキーのだ」
M「Mは、ミッキーの大きいのがあるよ」。K「どうぞ飲んでください」

35●M「いただきます」——生活習慣の言葉
父「M、いただきますを言わんにゃ」。M「いただきます」。K「じゃあ。いただきます」
M、ストローをつかって、ジュースを飲みはじめる。M「無くなってきた、ジュースが」

父「いただきますの挨拶があるんでしょ、ようちえん」。

36●M「ごはん、いっぱいたべるからよ」――人の会話を聞いていて
（父とKの会話。K「どこの幼稚園？」。父「S幼稚園」。K「お母さんは、今、どこ？」。父「T」。K「少し、遠くなったな」）
この言葉が「大きくなった」と、Mには聞こえたらしく、つぎの言葉が発せられる。
M「ごはん、いっぱいたべるからよ」。K「大きゅうなるのが？」。M「うん」。
K「ジュースも飲むからでしょう」。
K「やっぱり、幼稚園に行かんにゃあ、いけんもんだなあ」。

37●M「ごはんの前にジュース飲んだら、だめ」――生活習慣から生まれる言葉
M、とつぜん「あのね、ごはんの前にジュース飲んだら、だめ」と言いだす。
K「あっ、そう。しかし、きょうは。ちょっといいことにしてね」。
M「うん。ごはんじゃないときは、いい」。K「飲んでいいか」。
M、ストローで飲みおわったとき、ジューという音をさせる。声だして笑う。
K「おもしろいね、おじちゃんも、やってみよう。あれ、鳴らんよ」
K、飲みおわって「いうた、いうた」。M、声を出して笑う。
M、もう一度、ストローで吸って、音を出す。K「あっ、いうんだ。おもしろいね」

38●M「ごちそうさまでした」――生活習慣の言葉
M、ジュースを飲み終わる。M、自分のつかったコップとコースターをもって、Sのところへ持っていき、「ごちそうさまでした」という。

39●M「魚の本、あした、買ってくるよ」――会話の相手の言葉に触発されて
K、散歩の話をする。K「さっき（の散歩で）、なんとなんをとったか、覚えとる？」
K「チョウチョの本（昆虫図鑑）、あったかなあ。（いま、ここに）ないんよね。トンボの本はあるんだが」。M「Mね、魚の本、ちょっとあした、買ってくるよ」。
K「さっきとった真っ赤っかのトンボがおるじゃろう」

40●M「アメンボ！」――会話の相手に言葉の一部を教えてもらって
『水生昆虫』の図鑑を見ていると、最初にMが自分の指先でつまむことになったアメンボのページが出てきた。そこで、K「これなに？」とたずねた。
Mは、即座に「トンボ」といった。無理はない、直前に私が「トンボの本はあるんだが」といったのだから。そこで、私は、ゆっくりと一音ずつ区切って「ア・メ」というと、Mは「アメンボ！」と大きな声で叫ぶようにいった。K「これがアメンボ。2匹かね」

41●M「あっ、赤トンボじゃ」――物（図鑑）に触発されて
K、図鑑の中のトンボの仲間を捜す。アメンボのページの後、トンボのページが出てきた。

赤トンボのページである。K「そして、さっき、捕ったトンボ」

さらに、自分としては、大人のお父さんむけに言うつもりで、K「あっ、これだ。ショウジョウトンボ、赤トンボね」といった。すると、Mが「これ！」と図鑑の中の真っ赤なトンボを指さした。間違いなく、みんなで触った「ショウジョウトンボ」であった。

さらにMは、自分で見開きのページを見て、赤いトンボばかりを指さした。

M「あっ、これと、これと、これ、赤トンボじゃ」まちがいなく、赤い色のトンボばかりを指さしていたのであった。

42●M「これ、なんでしょう」——物（図鑑）を見て

図鑑を見ていたMが、いきなり「これ、なんでしょう」とKにたずねてきた。

私は、答えることができなかった。K「わからん。これ、Mがつかまえたぶん？」

K「ある？」。K「これ、なんでしょうをやってみようか」

K「じゃあ、おじちゃんが問題、出してもいい？　これ、なんでしょう」

M「うん？」。K「トンボ」。M「トンボ」。K「トンボでも、シオカラトンボよ」

M「じゃ、Mが出してみるよ」。M「カマキリ」。

K「カマキリじゃなくて、イトトンボといって小さいトンボよ。M、問題を出して」

マックン、図鑑をめくりながら、父「マックン、これは？」。M「カマキリ」

カマキリに似ている。K「ミズカマキリじゃ」

43●M「セミ、知っちょる？」——物（図鑑）を見て

そのあと、M「セミ、知っちょる？」。K「セミがね、なかなかおらんのよ」

『水生昆虫』の図鑑には、残念ながらセミは載っていない。

44●M「ブッブー」——会話の中の言葉に触発されて

そこで、この日の散歩の中で見かけることになったアマガエルのことを思いついて、K「アマガエル、おるんかな。あっ、水生昆虫だから、おらんのよな。ざんねん！」

Kの「ざんねん」という言葉を聞いて、Mが即座に「ブッブー」といった。

結果的に、アマガエルを水生昆虫図鑑で探したことが、ピンポンではなくて、Mの言葉「ブッブー」であったようだ。Kの方が「そうか、ふうん」と考え込まされることになった。

45●M「ちっちゃいの、M、とったよ」——物（図鑑）を見て

Mが「待ってよ」といって、幼児用の図鑑を持ってくる。じつは、夏休みの始めに、近所のナミ・ミカ・ジュリの3人といっしょに散歩したとき、3人が首からかけていた図鑑を、つい先日の散歩で借りていたのであった。居間のワゴンの中に入っていた熊の形の「おでかけずかん（注7）を見つけたのであった。

Kの方が、そのことを忘れていたのであった。子どもの目で部屋の中を見ると、目が留まるのか、思わず、K「それだ、それだ、そこにおるんだ」。M、図鑑のページをめくる。

K「あっ、M、さっき、さわったよ。モンシロチョウ」

M「ちっちゃいの、M、とったよ」

Mが自分でとったのは、ヤマトシジミである。Mの言うとおり、チョウの仲間のうちでは、小さなチョウのうちに入る。よく特徴を覚えているものであると感心させられる。

46●M「Mが、つかまえたのは、どれでしょう」――物（図鑑）を見て

さらにMは「Mが、つかまえたのは、どれでしょう」という。そう言いながらも、図鑑を見ながら、M、自分で「カブトムシ」と即座に言う。

K「Mがつかまえたのは、どれかなあ？」。M「バッタ」

K「これもバッタよ。そうだ、これもおった」

47●M「テントウムシばっかり」――物（図鑑）を見て

図鑑の中の、冬を越すテントウムシの群れの写真を見て、M「テントウムシばっかり」という。

K「よう知っているね、君は」と感心する。

48●M「あ・い・う・え・お」――物（図鑑）の文字を見て

すると、マックンが「ありのなかま」と書いてある見出しを見ながら「あ・い・う・え・お」と読みはじめた。父「ちょっと、ちがうようだね」。「あ」に気づいている様子である。

M「マックンがつかまえた」。M「グミ、グミ、グミじゃ」

49●M「アゲハチョウ」――会話の相手の言葉を聞いて

幼児用図鑑のページをめくっていると、偶然にもモンシロチョウのページのつぎに、もう1ページのチョウのページが出てきた。そこにはキアゲハ・クロアゲハ・キチョウ・ベニシジミの4種類が載っている。K「お父さんが捕まえたのは、これ。アゲハ」といった。

するとMは「アゲハチョウ」といった。

K「ようわかるなあ」と感心することになる。

（K「『おでかけずかん』といって、幼稚園の本の付録」と父に説明する。）

50●M「M、漢字、知っとるよ。クマの漢字、知っとるよ」――会話の相手にほめられて

葉書の入った箱が床に落ちて、M、片付けようとする。（S、手伝う）

片付けながら、M「M、漢字、知っとるよ。クマの漢字、知っとるよ」。K「何の漢字」。

M「くまの漢字。あ・め・ふ・り・く・まの漢字」。

葉書の片付けが、難しそう。M「あれ？」。

父「おばちゃんに、（片付けるのを）おねがいしますって」

51●M「おじちゃんは？」――遭遇した疑問を口に出して

K、2階に昆虫図鑑（チョウチョの本）を探しに行く。K「Mが本が読めるのを予想してなかったからなあ」と言いながら。Kが2階にのぼっていったあと、Mが「おじちゃんは？」と

いっている。M、2階に上がってくる。見当たらない。
M「おじちゃん」と呼ぶ。階段の上がり方、おり方も上手であった。
Mが、居間にあった地図を持ってくる。父「それはだめよ、地図だから」と教える。
（父「まあ、よう、ちょろちょろする」。S「よく分かって、もう安心ですね」
父「だいたい言ったことは分かります。ただ、分かっているが、できない。気分がいいときは、どんどんお片づけする。きょうは、おもちゃは買わないのよと言っても、（おもちゃの）前にいくと大泣きをする。」）

52●M「上の名前は、……。コアラ組の先生」――会話の相手の質問に答えて
K「Mの幼稚園の先生は、なんという名前？」とたずねる。
M「ミホ先生」と教えてくれたので、名前は「ミホ先生」ということはわかった。
K「上の名前は？」、つづけて「なにミホ先生？」とたずねてみた。
M「上の名前は、……。コアラ組の先生」
私のたずね方が悪く、上のクラスの「クラス名」を教えてくれたようであった。
父が助け船を出してくださった。父「マックンは、ラッコ組」。M「ラッコ組」
K「ラッコ組のミホ先生？」。K「Mはラッコ組のミホ先生が大好きなんだ。そう？」

53●M「デンデンムシ」――会話の問いに答えて
Mが、テレビの上においてあった赤い牛の置き物を、テーブルの上に持ってくる。この牛の人形は、張り子でできていて、指でつっつくと、首の部分が動く楽しい置き物である。
M、指でつっつく。首が動く。
K、ガラス製のクジラの置き物を、テーブルの上に持ってくる。体長は15cmばかり、ズシリと重いガラスの固まりである。Mに言われてみると、デンデンムシに見えてくる。
K「おじちゃんの大事なものを持ってこよう。これ、なに？　お魚だけど」
マックンは、即座に「デンデンムシ」と答えた。
K「もっとねえ、大きなもの。海で泳ぐ」。父「海で泳ぐ、バシャバシャと」
M「ええとねえ」。M、知っていないらしい。
K「クジラというのを、知っとる？」。マックンは、すぐに「クジラ」と声を出した。

54●M「アメンボー」――会話の問いに答えて
ついでに、赤い牛の置き物が、ウシに見えるものか、たずねてみた。
K「これは、なに？」。M「アメンボー」。K「アメンボじゃないよ」
K「これはアメンボじゃあないよ。ウシ」。M「ブタ」、K「ブタじゃないよ。ウ・シ」
Mは「ウシ」と復唱してくれた。
K、父へ「M、ウシのとこへ行って、見たことある」。父「ニュージーランド村で」

55●M「あっ、これ、M、つかまえたことある」――物（図鑑）を見ながら
幼児用図鑑を見ていたMが、急に「あっ、なにかある。これは、お父さんが捕まえたよ」

K「どれが、おとうさんのつかまえたぶん？」と、たずねる。
M「えっとお」、わからない様子。K「これだ」。M「これ。これも」
M「あっ、これ、マックン、つかまえたことある」。K「あっ、そう」

56●M「あっ、アリ、アリ」――物（図鑑）を見ながら
さらに図鑑を見るM、「あっ、アリ、アリ」。
K「あっ、ほんとう、これ、アリと書いてあるんよ」。
M、図鑑の「あ・い・う・え・お、アリ」。K「うん」
M「あ、い、う、え、お」。M「あ・い・う」、図鑑の「ありのなかま」の見だしの字を見ながら、声を出す。父「ちょっとちがったね」
K「「ありのなかま」とかいてあるんよね」。父「もうちょっとね」

57●M「もうちょっと、寄してあげる」――実物（扇風機）を見て
Mが、椅子から降りて扇風機のところへ行く。
M「もうちょっと、寄してあげる」といって、扇風機をみんなの方に近づけてくれた。

58●M「消防署のおじさんがくれたパンもあるよ」――相手の言葉に触発されて
Kが買ってきておいたパンを食べることにする。K「パンを食べよう」。K、台所にいるSに対して「Mにおじちゃんが買ってきたパンがあるじゃろう」といって、Mが食べるパンを持ってくるように伝える。
Kの言葉の中にあった「パン」という言葉から思い出したのであろう、M「消防署のおじさんがくれたパンもあるよ」という。

59●M「おなか、いっぱいだからええ」――物（食べ物）を見て
Sが皿に載せたパンを持ってきて、Mの前に置く。M「M、おなか、いっぱいだからええ」と、目の前のパンを食べたくないのだという。父よれば、マックンが遠慮しているらしい。
K「じゃあ、袋に入れて、もって帰ってもらおう」。

60●M「アンパンマン」――質問への答として
K、Mに「これは、何のパン？」とたずねる。Mは、Kの問いに応えないで、子ども用の図鑑のひもを首にかけている。
もう一度、K「何のパン？」。M「アンパンマン」
K「アンパンマンのパンよね。これ、マックンにいいだろうと思って、おじちゃん、買いにいったんよ」

61●M「うん」――会話の中の返事として
M、リュックサックの口を広げて、中を見せてくれる。
K「着替えか？」とたずねる。S「いつも着替えを（持っているの）？」とたずねる。

父「いつもはないんですが、まさか無いだろうと思ったら、(Mが)「着替えがあるのう」と言うから」

父、Mに向かって「ちゃんと(着替えが)入っとったね、M」。

M「うん」と、強い口調で言った。

62●M「Mが赤ちゃんのときに、おじちゃん、来た?」——物(写真)に触発されて

居間の壁の写真を見ているMに対して、K、「桒原先生の家の赤ちゃんよ」と教える。

K「Mも小ちゃいけど、もっと小ちゃい赤ちゃんがおるんよ」

M「あの、Mちね、あのね、ええとね、あの、Mが赤ちゃんの時に、おじちゃん、来た?」。

K「うん、おじちゃん、(Mが)赤ちゃんのときに行ったよ。歩きはじめて、ちょっとしたときにね」。Mが(1歳3か月の)赤ちゃんのときにKが行ったことを伝える。

63●M「バチャ、バチャ、こうやって泳ぐ」——体験した事を再現しながら

M、とつぜん「バチャバチャ、こうやって泳ぐ」といって、床の上に腹ばいになって、水泳の真似をする。

K「そうやって、泳ぐん?」とたずねる。M「うん」と答える。

64●M「手を洗わんと、ばいきんがおるよ」——既知の言葉を想起して

会話のために中断していたが、パンを食べることになる。

K「おじちゃん、食べるよ。マックン、食べない? お父さんも食べない?」

父「手を洗っておいで」。K「手を洗ってこよう」

M「手を洗わんと、ばいきんがおるよ」。

MとK、いっしょに手を洗いにいく。M、石けんをつけ、両手をこすり合わせて洗う。

M「手を洗ってきたよ。手を洗ってきたよう。手を洗ってきたよう」

K「もう食べていいよ」。父「いただきます」。M「もう、おなか、ぺこぺこ」。

65●M「いただきますのお祈りをはじめます」——他の場所で覚えた言葉を想起して

M、とつぜん、椅子から降りて、横に立つ。

M「いただきますのお祈りをはじめます。神様、きょうもおいしいお給食をありがとうございます。いただきます」。

K「おじちゃん、さきに食べちゃって、ごめんね。神様に、言うんだ。もう一回、教えてくれる? 神様?」

M「神様、きょうも」といいかけて、はじめから言い直す。

M「いただきますのお祈りをはじめます。神様、きょうもおいしいお給食をありがとうございます。いただきます」

Kと父、Mの「いただきます」の合図で、声を合わせて「いただきます」と挨拶をする。

66●M「ごちそうさまもあるよ」——関連した言葉を想起して

「いただきます」の挨拶が終わったとき、M「ごちそうさまもあるよ」という。

K「じゃあ、ごちそうさまもやって」という。

M「ごちそうさまのお祈りをはじめます。神様、きょうもおいしいお給食をありがとうございます。ごちそうさまでした」。最後の「ごちそうさま」の言葉は、少し大きな声で言う。

父「どうやら、あの時に声を合わせるみたいですね、「ごちそうさまでした」と大きな声で」

K「食べてくださいよ、おじちゃんね、Mがアンパンマンが好きじゃないかと思ってね（買ってきたよ）。（アンパンマンの形のパン）見ることはあるんだが、買うのははじめてよ」

67●M「チョコレート、いやだ」——実際に物（パン）を食べてみて

M、食べたとたんに「チョコレート、いやだ」と言う。パンの表面についている茶色の線の部分を食べたようだ。K「それがチョコレート？　これ、いやなん？」

父「ちょっと食べてごらん。それチョコレートじゃあ、ないよ」

K「まひげ（眉毛）と、お目め、お父さんにあげて」。M、パクリと食べる。M「あんこ」という。M、ランチョンマットの上の小さなフォークで突き刺すようにして、口に入れる。

68●M「これ、りんご？」——実物（パン）を見て

アップルパイ風のパンも買ってきておいた。父「これ（アップルパイ）を食べてみよう」

M「これ、りんご？」とたずねる。K「りんご、よう知っとるね、アップルパイ」

69●M「ミッキーのねじまいたら、クッククックーとなるよ」——自宅の物を想起して

K、前回のM宅の訪問のときにMより教えてもらった人形を思い出して、「Mのミッキーちゃんは、おるよね。いつか見せてくれたよね。ミニーちゃんもおるよね」。

M「あのう、大きいのもおる」。

K「大きいのもおる？　おじちゃんにね、教えてくれたんよ。ミッキーとミニーちゃんは仲良しなんでしょ」

M「あのね、ミッキーのねじまいたら、クッククックーとなるよ」

ネジを巻くと動くおもちゃのことを言っている。K「おもちゃが、あるん？」

M「うん、こうやって行くよ」といいながら、自分の左右の手を胸の前でくるくると回す。

それは、ちょうど「かいぐり」をするような動作である。

K「こんど行くから、そのおもちゃ、見せてくれる？」。M「うん」。

K「こんど（M宅に）行って、おもちゃ、見せてもらわにゃいけんわあ。ようけ（たくさん）あるじゃろう」。

70●M「ねえ、Mちへ泊まらん？」——相手の言葉に即発されて

Kの「こんど（M宅に）行って」という言葉に触発されて、Mが「ねえ、Mんちへ泊まらん？」と聞いてくる。K「いいよう、泊まっても泊まらんでも、行くだけ行ってみようか」

71●M「M、このうち、泊まらん。…風邪ひくもん」——直前の父との会話を想起して

M「M、このうち、泊まらん。だって、ぼく、このうち、泊まってたら風邪ひくもん」。
K「クーラー、きいとるからかなあ」
父「車の中で、パパが、この家に泊まったという話をしてきた」
K「こんど泊まるときは、パジャマ持っておいで、M。風邪ひかんから」

72●M「あの、ホーホー、ホタルこい？」――相手の質問に答えて
Mが、このうちに泊まることがあれば、タイミングさえ合えば、家の近くでホタルを見ることもできる。そこでK「M、ホタル、見たことある？」とたずねてみる。
M「あの、ホーホー、ホタルこい？」と歌いながら、問う。
K、父に対して「マックンは、ホタルを見たことある？」とたずねてみる。
父「あります」とのこと。K「そのホタルが、この近くにおるんよ」

73●M「何がある？」――実物を見て
M、居間の壁に掛けてある面を見ている。韓国の伝統的な面で、ヤンバン（両班）とブネ（愛妻）の面が並んでいる。それを見ていたMが「何がある？」とKにたずねた。
韓国の伝統文化の仮面劇にもちいる小さな面を、3歳の子どもに、どう説明したものか困ったが、私は「よその国の、おじいちゃんとおばあちゃん。日本の人でなくて」と説明した。ついでにピアノの上においてある韓国の若者の全身の人形を見せた。韓国の伝統的な結婚衣装を身につけた人形である。

74●M「だれえ？　教えて。教えて」――他の人の会話を聞いていて
K、人形の前においてあった2枚の写真を父に手渡した。父も知っているT県のK先生の子どもさんが釣り上げた大きなニジマスの写真である。K「Kさんの、息子さん。中1」。
この話を聞いていたM「だれえ？　教えて。教えて」とたずねる。
息子さんが40cmをこえるニジマスを両手で持って、得意顔で写っている写真である。
父「大きいなあ、こんなんがいるんですか。（釣りに）行かんといけんですねえ」
こんどはM、テーブルの上においてあるミニアルバムを見る。
6月に、となりのマー君（中1）と魚釣りに行ったときの写真も見せようと思って、K「このあいだのマー君の写真はどこかな」とさがす。
S「この前の大きい（魚のとき）の（写真）は、わからない」
大人が、そのような会話をしているときにも、Mはミニアルバムの中の写真をずっと見ている。K「なにか、ある？」とたずねる。

75●M「あっ、これ、さっき通ったやつ」――物（写真）を見て
急にMが写真の中の溝を指さして、「あっ、これ、さっき通ったやつ」という。その写真を見せてもらうと、水の流れている溝が写っている。さきほど歩いた散歩道横の溝と思ったらしい。しかし、その写真の溝は広く大きな溝である。私たちが散歩したあぜ道そばの溝は、草におおわれた幅50cmばかりの小さい溝である。

K「ちょっと似とるけどね」という。それにしても、写真の中の溝と、現実の溝が結びついたことに感心する。

76●M「なにもない」――物（写真）を見て

K、この日のMとの散歩を思い出しながら、「しかし（散歩の中で獲物が）よく取れたね、あれだけ。M、いやがらずに、（取った物は）すべて触ったね。なかなか怖がるのにね」　父「おじいちゃんと畑にいって、たぶん、ぼくよりも詳しいと思いますよ。野菜の種類とか、掘ったり、獲ったり」

写真を見ていたが、M「なにもない」と言って、写真を元の位置にもどす。

77●M「M、おしっこにいってくる」――自分の気持ちを伝えようとして

急に、M「M、おしっこにいってくる」。

K、トイレの場所と、終わったら踏んでね（使い方）を教える。いつもとは違う使い方。

父「自分でできるじゃ一人でできる」。M、お父さんといっしょにトイレに行く。

（その間の桒原夫婦の会話。K「マックン、ことばがすごいのう、3歳と7か月よねえ」）

78●M「こっち？　おじちゃん」――相手にたずねたいことを表して

M、トイレから帰ってくる。トイレのあとの手洗い。K、マックンに向かって、「もう一回、手を洗っておいで」M、洗面所の方へ行って、「こっち？　おじちゃん」とたずねる。

K「そこそこ、そこで、ごしごし洗ってよ」

マックン、石けんをつかって手を洗う。

79●M「チョコレートばかりはいやだ」――実物を見て

11時48分ごろ、父「それじゃあ、そろそろ」と、帰ることを告げられる。

K「あのパン、袋に入れよう」

M「チョコレートばかりはいやだ」

K「そう。でも、お母さんに、こんなのがあったと、見せてあげて」

父「おみやげ、もらったねえ」

M「こんなん？」

K「もう1個」と、おみやげのパンを、もう一個入れてやってというつもりで。

M「もう1個？」

80●M「いい」――相手の質問の返事として

K「こんど、また、おじちゃん、遊びに行っていい？」と、M宅を訪ねることを約束する。

M「いい」。K「そのとき、チョウやトンボをとってみせてね」

81●M「いいもの、もらっちゃった」――物（お土産）に触発されて

S、Mに、お土産として小さな鉛筆削りの入った白い箱を手わたす。

M「なに、これ？」。S「あけてごらん」

M「いいもの、もらっちゃった」。父「ありがとう、言った？」。M「ありがと」
M、父に対して「これ、開けて」。K「えっ、なになに」
82●M「これ、回る？」――物（人形）に触れた事に触発されて
箱の中には、人形のついた小さな鉛筆削りが入っている。鉛筆削りの部分が台となって、その上に童話に出てくる人形が立っている。イタリアのお土産である。
M「これ、回る？」と、人形の部分が回転するかどうか、たずねてくる。
K「まわらない。鉛筆削りというのはわかるかな」。
（S「ちょっとまだ早いかな」。K、Sに対して「どこの国だった？」とたずねる。）

83●M「なに？」――室内にある同じような物（人形）を見て
M「なに？」。Mは、同じような人形がテレビの上においてあることに気づく。
同じような鉛筆削りの人形なのであるが、台の上についている人形がちがうのである。
S「同じ。ちょっと形がちがう」。

84●M「ありがとうございます」――父の言葉に促されて
父「M、ありがとうございます、言うとって」
M「ありがとうございます」。人形つきの鉛筆削りを、箱の中に入れる。

85●M「まだ、帰らんのよ」――父の言葉に対して
父「じゃ、車」。M「まだ、帰らんのよ」。
父「マックン、昼ごはんよ。ママが待ってるよ、マックン、まだかなあと」。
父、Kの方を向いて「よその家へ、あまり行ったことがない。Tの実家と・・」

86●M「おみやげ、もろうて帰る」――人の動作を見て
M「おみやげ、もろうて帰る」。S、また、何かを取り出して、Mに見せる。
M「これ、なに？」。S、小さなキツネのキーホルダーを出してきて、Mに手わたす。
さらに、K、部屋の中にあった木彫りのキツネの飾りを指さしてK「キツネさん、これ、腕、組んでいるよ」。K「Mは、こっちのキツネさんでかまんしてもらおう」
K「また、こんど、いくからね」
M「帰り、Mのおみやげ、買って帰る」。

87●M「ぜんぶ、M」――実物（カワラナデシコ）を手にして
帰るとき、Mが玄関の一輪挿しにさしておいたカワナデシコに手を伸ばそうとする。散歩のときに摘んで、おみやげに持ってかえることになっていたカワラナデシコである。1本だけでは、足りない。そこで、K「マックンの、あの花を摘んでこう（摘んで来よう）」といって、すぐに池西側の散歩道に行く。5、6本のカワラナデシコを摘んでくる。
たばねたカワラナデシコの茎に、ティッシュペーパーを巻きつけて、Mに手わたす。
S「忘れ物は、ない？」。マックンの帽子を部屋の中にとりに入る。

K、カワランデシコを指さしなら「だれのおみやげだったんかな」。
父「誰のかな」。M「バーバー」
父、祖母が、8月末まで検査入院とのことを教えてくださる。この日の夕方、病院へ行くとのこと。
K「おばあちゃんにあげてね」。父「半分は、おばあちゃんね」。
束の中から1本だけが、はずれた。M「これは、バーバー」
K「これはバーバー、これはM？」
M「ぜんぶ、M」
K、はずれて落ちた1本を入れて、花束を巻きなおす。K「おばあちゃんにも上げてね」

88●Ma児「花びんってなに？」——わからない言葉を質問して
帰りぎわ、K「おかあさんに、花びんにいれてもらってね」という。
M「花びんってなに？」。K「あのね、水の入った入れ物」
車が動きだす。K、父親とMに向かって「ありがとう、また」。M「バイバイ」

K、Mと父が乗った車が、角を曲がって見えなくなるまで見送る。(12時03分)
散歩のはじめは11時であったので、およそ63分ばかりのMとのつきあいであった。

3．考察

63分にわたるMとの散歩に関連する活動の中で、「言葉を促すもの」として88の類型化が可能であった。もとより、幼児の言葉が単一の要因で促されるものではないことは、はじめに断ったとおりである。けれども、現時点で可能となる88の項目を、大まかに分類をしてみると、次のようになる。

①Mが直接的に見たり触れたりした物が発語を促したとみられる項目は、以下の38であった。それは、全88項目の43.2%に相当する。
ただし、「*1」を付した「20」は網という物をつかった事柄であり、「*2」を付した「30」は音であり、さらに「*3」を付した「69」は家庭にある物の想起であるが、ここに入れた。
02●M「これ、見て！　ユンボ」—持参した実物を持って
04●M「あれっ。赤いやつ、赤いやつのバッグ」——自分の持ち物を想起して
08●M「こんどは大きいのをとって」——実物（アメンボ）を見て
09●M「チカッと、せんじゃあ」——実物に触れてみて
12●M「こんど、ぼく、つかまえる」——実物（網）を使うのを見て
14●M「クモ」——実物を見て
15●M「ほら、ピョンと、とんだ」——実物を見て
16●M「ミミズ、つかまえたことある」——実物（ミミズ）を見て
*1 20●M「こんどは、Mが捕まえたろう」——周囲の人のしている事に触発されて
22●M「M、はだしになる」——目前の物（水たまり）に触発されて

23●M「Mはね、お着替え、持ってきた」――持参物を想起しながら
25●M「ほら、こうしたら、飛べる」――実物（チョウ）を持ってみて
26●M「あっ、はたけ」――実物（池の様子）を見て
28●M「これ、ババに、おみやげ、しよう」――実物（花）を見て
*2 30●M「さっきのサイレンは、お昼ごはんの時間ですよと、言ったんよ」――音を聞いて
41●M「あっ、赤トンボじゃ」――物（図鑑）に触発されて
42●M「これ、なんでしょう」――物（図鑑）を見て
43●M「セミ、知っちょる？」――物（図鑑）を見て
45●M「ちっちゃいの、M、とったよ」――物（図鑑）を見て
46●M「Mが、つかまえたのは、どれでしょう」――物（図鑑）を見て
47●M「テントウムシばっかり」――物（図鑑）を見て
48●M「あ・い・う・え・お」――物（図鑑）の文字を見て
55●M「あっ、これ、M、つかまえたことある」――物（図鑑）を見ながら
56●M「あっ、アリ、アリ」――物（図鑑）を見ながら
57●M「もうちょっと、寄してあげる」――実物（扇風機）を見て
59●M「おなか、いっぱいだからええ」――物（食べ物）を見て
62●M「Mが赤ちゃんのときに、おじちゃん、来た？」――物（写真）に触発されて
67●M「チョコレート、いやだ」――実際に物（パン）を食べてみて
68●M「これ、りんご？」――実物（パン）を見て
*3 69●M「ミッキーのねじまいたら、クッククックーとなるよ」――自宅の物を想起して
73●M「何がある？」――実物を見て
75●M「あっ、これ、さっき通ったやつ」――物（写真）を見て
76●M「なにもない」――物（写真）を見て
79●M「チョコレートばかりはいやだ」――実物を見て
81●M「いいもの、もらっちゃった」――物（お土産）に触発されて
82●M「これ、回る？」――物（人形）に触れた事に触発されて
83●M「なに？」――室内にある同じような物（人形）を見て
87●M「ぜんぶ、M」――実物（カワラナデシコ）を手にして

幼児にとって、実際に見聞したり実物に手に触れることが、言語活動を促す最も大きな要因であることが、あらためて判明する。

②M、父、K、Sとの間で交わされる会話が発語を促したとみられる項目は25であった。
それは、28.4％に相当する。

18●M「マックンはね、いちばん上手」――会話の言葉に触発されて
19●M「ミミズ、パッとつかまえたことある」――会話の言葉に触発されて
21●M「網、あるよ」――周囲の人の会話を聞いて
24●M「アゲハチョウだ」――直前に覚えた名前を想起して
31●M「ジュースが並んだら食べるん？」――会話の言葉に触発されて

32●M「手も大きゅうなった」――会話の言葉に触発されて
33●M「M、お当番、やれるもん」――会話と関連する事柄を想起して
34●M「Mは、ミッキーの大きいのがあるよ」――会話の言葉に触発されて
36●M「ごはん、いっぱいたべるからよ」――人の会話を聞いていて
39●M「魚の本、あした、買ってくるよ」――会話の相手の言葉に触発されて
40●M「アメンボ！」――会話の相手に言葉の一部を教えてもらって
44●M「ブッブー」――会話の中の言葉に触発されて
49●M「アゲハチョウ」――会話の相手の言葉を聞いて
50●M「M、漢字、知っとるよ。クマの漢字、知っとるよ」――会話の相手にほめられて
52●M「上の名前は、……。コアラ組の先生」――会話の相手の質問に答えて
53●M「デンデンムシ」――会話の問いに答えて
54●M「アメンボー」――会話の問いに答えて
58●M「消防署のおじさんがくれたパンもあるよ」――相手の言葉に触発されて
60●M「アンパンマン」――質問への答として
61●M「うん」――会話の中の返事として
70●M「ねえ、Mちへ泊まらん？」――相手の言葉に即発されて
72●M「あの、ホーホー、ホタルこい？」――相手の質問に答えて
74●M「だれえ？　教えて。教えて」――他の人の会話を聞いていて
80●M「いい」――相手の質問の返事として
88●Ma児「花びんってなに？」――わからない言葉を質問して

幼児にとって、家族や身近な人間が、会話の場面において子どもの状況に応じた対応をすることの大切さを物語っている。

③Mに特徴的なのは、過去の経験や既知の知識からの言葉が、適切な場面で使用されていることである。それに関する項目としては、次の9項目(10.2%)があった。

05●M「きょうトンボ、おらんよ」――既知の知識を想起して
06●M「カブトムシもおるよ。クワガタもおるよ」――既知の知識を想起して
07●M「(網を)グーッとやってえ」――過去の経験に照らし合わせて
10●M「すぐ逃がしてあげんと、死ぬる」――既知の知識をもとにして
11●M「(アマガエルを)さわったことある」――過去の経験を想起して
17●M「たたいたら、来る」――過去の経験をもとにして
27●M「バチャバチャ泳げばいいじゃあ」――過去の経験をもとにして
63●M「バチャ、バチャ、こうやって泳ぐ」――体験した事を再現しながら
64●M「手を洗わんと、ばいきんがおるよ」――既知の言葉を想起して

④Mの言葉や動作は、とても礼儀正しい。その裏には、次のような基本的生活習慣にかかわる言葉も、次のような形で表されている。8項目(9.1%)を数えた。

29●M「足、洗うて入る、ぼく」――生活習慣をもとにして

35●M「いただきます」――生活習慣の言葉
37●M「ごはんの前にジュース飲んだら、だめ」――生活習慣から生まれる言葉
38●M「ごちそうさまでした」――生活習慣の言葉
65●M「いただきますのお祈りをはじめます」――他の場所で覚えた言葉を想起して
66●M「ごちそうさまもあるよ」――関連した言葉を想起して
77●M「M、おしっこにいってくる」――自分の気持ちを伝えようとして
84●M「ありがとうございます」――父の言葉に促されて

⑤今回の散歩を実施するにあたって、父親などから事前に教えてもらったとみられる知識も見逃せない。以下の3項目であった。
01●M「くわはらせんせい」――事前に教えてもらって
03●M「これ、ビール、冷やして飲んでください」――事前に教えてもらって
71●M「M、このうち、泊まらん。…風邪ひくもん」――直前の父との会話を想起して

⑥そのほかの項目としては、次の事柄があった。いずれも新しい事態に対応して発語されたMの言葉である。5項目(5.7%)である。
13●M「ぼく、行かれんから」――新しい事態を前にして
51●M「おじちゃんは？」――遭遇した疑問を口に出して
78●M「こっち？　おじちゃん」――相手にたずねたいことを表して
85●M「まだ、帰らんのよ」――父の言葉に対して
86●M「おみやげ、もろうて帰る」――人の動作を見て

以上、筆者がここ9年間にわたって日常的に幼児と散歩しているコースでの、Mの言葉の多様さの実態を明らかにしたくて取り組んだ論文である。しかし、このたびはスペースの関係でMの言葉の事実を記録することが中心となった。今後とも、この研究を継続する。

（注）
（1）文部省『幼稚園教育要領』大蔵省印刷局、平成10年12月17日、10ページ。
（2）幼稚園教育要領中の「環境を通して」が間接教育であることについては桒原昭徳著『間接教育の構造――倉橋惣三の幼児教育方法――』（ぎょうせい、平成6年）において詳述している。
（3）桒原昭徳著『幼児との接し方――韓国で出合った子どもたち――』、ぎょうせい、1999年、45～57ページ
（4）同上書、57～66ページ。
（5）桒原昭徳著『マー君の散歩道』ミネルヴァ書房、1995年。
（6）拙著『幼児との接し方』ぎょうせい、1999年、49・50ページ。
（7）チャイルドブック・ジュニア、4月号特別付録「おでかけずかん」（平成9年4月1日発行）。